

「世界の古代壁画の保存と活用」を聴いて

聴講日：H29.11.11  
むきばんだやよい塾第18期

日本の文化財保護

日本で最初にできた文化財保護に関する約束ごとは、明治4年(1871年)の「古器旧物保存方」であると言うのが一般的です。明治政府が布告した神仏分離令が直接的原因となり、廃仏毀(き)釈と旧物破壊の嵐が吹き荒れ、文化財の危機に直面したのを見直す取り組みでした。その後民族的自覚が高揚し、明治29年(1896年)には「古社寺保存法」が成立しました。この古社寺保存法は、国による制度的な保護を古社寺の所有する建造物と宝物に限定していました。しかし、城郭建築や旧大家の所有宝物類等社寺以外の文化財で保存措置を要するものも多く、時代の推移とともにその必要性が高まったことから、昭和4年(1929年)に国宝保存法を公布するに至りました。

維新後の日本は盲目的に西洋文明を崇拜し、日本古来の浮世絵や屏風は二束三文の扱いを受けており、狩野派、土佐派といったかつての日本画壇の代表流派は世間からすっかり忘れ去られていました。お雇い外国人だったフェロノサは、仏像や浮世絵など様々な日本美術の美しさに心を奪われました。そして、寺院や仏像が破壊されていることに強い衝撃を受け、日本美術の保護に立ち上がりました。フェノロサは文部省の岡倉天心と古社寺を歴訪し、法隆寺・夢殿の創建時からの“絶対秘仏”である救世観音像を公開しました。また、岡倉天心の提案を受けて法隆寺金堂壁画保存建議書が上申され、1920年に『法隆寺壁画保存方法調査報告書』が発行されました。

この中では、根本的保存方針と応急的保存方針が述べられていますが、壁については、表1に示すような3層構造であることが報告されています。また1940～49年には政府の主導で4名の日本画家による金堂壁画の模写が行われています。残念ながらこの模写中の1949年1月26日に暖をとるための電気製品からの出火と思われる火事で焼損してしまいます。

表1 壁体の調査(金堂壁画)

③上塗: 粒子径が0.003～0.05mm程度の細砂(石英・角閃石など) * 塑像は表土 ⇒ 「砂質土」+「スサ(和紙の繊維)」
②中塗: 下塗りと同種の土に珪石質の細砂を混ぜたもの、ワラ?は細片 * 塑像は中土 ⇒ 表土より「やや砂質の土」+「もみ殻」
①下塗: 粘土+わらすサ (粘土は瓦の製造に使われるものと同種、わらすサは長短粗刻みのもの) * 塑像は荒土(粗土)と呼ばれ ⇒ 「粘土」+「わらすサ」

法隆寺にはたくさんの仏像があり、銅像や乾漆像に混じって天平時代に土で作られた多くの塑像もあります。これらの塑像は焼結された焼き物と異なり、乾燥させているだけですが、作られてから1300年以上経った現在も良好に保存されています。これは、塑像が表1に示されたように壁体と同じように3層構造を有しているからです。外からの湿気をより吸水能力の大きい内部の粘土層に移行させるとともに、表層の膨潤乾縮率が小さいことが安定化に貢献しています。

壁画の顔料

壁画の顔料について表2に示します。保存対象である法隆寺壁画は分析のためとは言え、採取することは控えられ、焼損後も変わりませんでした。ところが、1990年に法隆寺のものと同様同時期の古代寺院壁画が鳥取県上定廃寺跡から出土しました。上定廃寺の壁画は火災のために熱を受けて変色したものであり、長年月の時空を経て退色したものと異なっています。退色した顔料の分析をもとに当初の色の再現を試みることができます。分析可能な多くの出土試料が壁画研究に大変貢献しました。

表2 壁画顔料の調査(法隆寺金堂焼損壁画)

赤系	: 朱(辰砂)、鉛丹 *のちに、山崎一雄は紅柄(ベンガラ)を確認
黄色	: 黄土、密陀憐を確認
緑系	: 緑青の確認
青系	: 報告書で1ま確認できていない *山崎一雄が群青(藍銅鉱)を確認
白色	: 白土、鉛白(塩基性炭酸鉛)、顔料ではないが胡粉
黒色	: 墨
紫色	: 朱と藍(アイ)タンの混合物と推定するも、確証無し *藍タンは、有権質の染料との推定もあり、不明

### ヨーロッパの洞窟内環境

目を海外の壁画に転じてみますと、関西大学が実施中のエジプト・サッカーラに所在するイドゥートゥ地下墳墓における壁画保存のプロジェクトは、高松塚古墳などとは対照的な取り組みがされています。この地域の外気温の変動は激しく、一日の中でも5℃から40℃までの変化を示し、湿度に関しては、砂漠地帯独特の変動の激しい2.3~100%を示します。墓室は地下10mのところにあつて、周囲の決して過剰ではない水分の存在と石灰岩の吸放湿性が相俟って、湿度は55±7%を、温度は23±1℃という、きわめて安定しているのです。

フランスの西南部に位置するラスコー洞窟は、穴に落ちた飼育犬を救出した時に少年が発見したと言われ、地下に長く伸びる洞窟に壁画が描かれています。彩色顔料については、赤土、木炭などを獣脂・血・樹液などと混ぜ合わせて色を創り出したといわれています。閉鎖系の空間の中で、低温でありながら、しかも年間を通じて温度の変動幅がごく小さく、安定した環境にあつた洞窟壁画ですが、1962年頃から壁画面にカビが発生したとして、非公開となりました。当時、見学者数が1日に1800人を超えたことが主な原因ではないかと考えられています。また、保存管理のために出入りしたこと自体が窟内の温度上昇につながつたとも言われています。

### 中国・石窟寺院壁画

中国には石窟寺院が数多く存在し、優れた仏教壁画や塑像、石像が造られています。新疆ウイグル自治区庫車県に所在するクムトラ千仏洞があります。ここでは、112の石窟が確認されていて、ユネスコによる支援事業として修理が行われました。現地の関係者と協議を進めるうちに、壁画そのものよりも石窟自体の崩落が危惧されることが明らかになり、山全体を土木工学的な事業で補強することになりました。

中国・甘肅省・天水市所在の世界遺産でもある麦積山石窟寺院は、1952年に発見されました。山の形が麦わらを積み上げたような形をしているとのことでこの名が付いたそうです。岩質は礫岩で、北魏、西魏、北周から隋・唐、そして宋から明代に至るまでに194の窟が確認されています。隋、唐代にも栄えた塑像、石像、そして壁画が存在し、修理にかかる共同研究事業の準備を進めているところです。

歴史的遺構から出土した出土遺物は広く公開し、多くの人目に触れることで非常に有益ですが、外気に曝されることで変質し、崩壊するリスクが高まります。安定な環境が保証される博物館等での展示が解の一つではありますが、海外では、出土状態や周囲の状況、地理的環境等を体感できる現地展示を選択される傾向があるようです。遺物・遺構の保存、調査、展示について考えていくことが必要です。